

## 心理科学部研究紀要第3号の発刊にあたって

心理科学部長 阿部和厚

大学院心理科学研究科の平成19年度最大のトピックスは、臨床心理学専攻と言語聴覚学専攻ともに、平成19年度文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」に採択されたことです。臨床心理学専攻の取組は「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」、言語聴覚学専攻の取組は「言語聴覚士卒後研修プログラムを含む大学院－医療技術系大学院のモデル」です。このプログラムは、わが国の大学院教育を実質化していくための国としての3年間の投資です。両専攻は、責任に応えるべく活発な活動を開始しました。

文部科学省は、平成18年度に大学院設置基準を改定し、大学院教育の実質化を求めています。各大学は、大学院が学部と同様に、教育機関として組織的に、体系的に設計され、学生の学習目標達成にむけて構造化されたカリキュラムにもとづいて教育を進めることを求めています。一般的にみると、これまでの日本の大学院教育は、指導教授に弟子入りして研究を学ぶというような感覚でした。1対1の教育こそ、教育の原点であり、教育の質が保証されていました。しかし、大学院としての組織的、体系的授業はほとんど行われていませんでした。後継者養成としてはよくても、一般社会に出て活躍するには、大学院修了が必ずしもメリットにならないという発言も聞こえていました。一方、少子化による大学全入、大学大衆化の時代となって、高度な専門性は大学院教育に依存せざるを得なくなっています。そして、大学院への社会のニーズは、学問の後継者養成よりは、実社会で使える人材を育ててほしいというようになってきています。専門職大学院もその路線です。

専門職養成大学は、医学教育で長い歴史があります。医学教育は、近年、国際水準の医師養成のために、6年制学部教育につづいて、資格取得後2年の卒後臨床研修を義務付け、さらに専門医取得には4から5年の研鑽を必要としています。8年教育が義務であり、10数年の学びでベテランとなる仕組みです。そして、臨床の発展は基礎研究にしっかりと支えられています。専門学校による教育が中心であった医療技術職養成は、近年、医師とともにチーム医療を担う職種として教育の大学化が進んでいます。

医療職としての言語聴覚士は、米国では10年教育で養成されています。言語聴覚士養成教育は、日本では、国際水準の教育、研究という面では、大きく立ち遅れています。今回、採択の私たちの「言語聴覚士卒後研修プログラムを含む大学院」は、国際水準の医療技術職養成を意識した第一歩です。

一方、臨床心理学専攻は、全国の約150大学と同様に、臨床心理士資格認定協会による修士課程の大学院教育を柱にすることになりますが、今回採択の「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」にみられるようにとくに医療の現場で必要とされる臨床心理士養成、そして社会との連携で専門性を発揮していく臨床心理士養成を特色としています。そして、この専攻もまた高度専門職人養成を明確な主軸としています。

心理科学部研究紀要からは本大学院の研究の一端が伺われます。大学院教育は、高度専門職業人養成とともに、このような専門家の基本を支える研究力、研究的ものの見方、科学的視点や能力を身につけることも目的としています。紀要が、このような目的のために大いに活用されることを期待します。